

# 桃林の蹊を歩いて

生活デザイン学科 名誉教授 山田令子

岐阜市立女子短期大学 創立 70 周年 誠におめでとうございます。昭和 30 年 3 月本学を卒業し、高校の教員を経て 9 月助手が増員された期に母校で勤めることになりました。当時何も分からず先生方の授業のお手伝いで精一杯でした。被服材料学の村瀬教授から研究の大切さを教えられました。しかし当時被服科には研究費が無く、先生から「研究費が無ければ工夫して装置を自作してやりましょう」と言われました。努力の成果を論文にまとめ家政学会誌に掲載されたのはその後の研究を行う上でよい経験となりました。その後研究費が付き、設備も諸先生方の努力で、他短大に比べて遜色なく充実し、衣料管理士資格認定制度の導入もあり着実に成果をあげてきました。

昭和 34 年 9 月 26 日伊勢湾台風で被服科は甚大な被害を被りました。染色実習室は崩壊し被服関連施設の屋根は吹き飛ばされました。流失した提出作品を遠くまで探しに行ったり、教職員一同一丸となって必死で復旧に務め、10 月 11 日授業再開に漕ぎ付けました。

研究会等でデザイナーの方々の話を聞き、山本寛斎氏の「元気印」に感動しました。そこで山本氏に“岐女短には内気でおとなしい学生が多いので何とかあの元気を貰いたい”と手紙を書き、東京の事務所にもお願いに行きました。快諾を得て平成 2 年 7 月文化センターで特別公開講座を開催し大盛況でした。これが機になって客員教授をお願いしています。

平成 2 年から全ての学生に卒業研究を課し、平成 6 年より研究発表、ショー発表、展示の 3 部門形式で、文化センターで一般公開にして行いました。生活科学コース 72 名、服飾デザインコース 39 名計 111 名の大所帯、初めてのことで発表迄漕ぎ付ける大変さを乗り越えることができたのは先生方の一致した努力があったからだと思います。

私が勤め始めた昭和 30 年代の家政系は食物と被服が主流でしたが、家庭生活に基盤を置く被服は社会情勢の変化と共に何時の時代も厳しい状況におかれ、その対応のため改組、転換、コース制導入と変化させ時代にマッチしたシステムが強く求められてきました。振り返りますといつも改組のため議論を闘わせたことは懐かしい思い出です。

私は多くの良き教職員、同僚、学生に恵まれて、平成 12 年 3 月桃林のキャンパスで定年を迎えました。同年 4 月キャンパスも桃林の地から新しい地に移転し、学科名も被服学科から生活デザイン学科として新しい体制で出発しました。これからも 18 歳人口の減少、四大志向による短大離れ等幾多の困難が横たわっていると存じますが、一つ一つ克服されて素晴らしい学園に発展することを祈念いたします。